

準々決勝進出 予想的中！ お酢の大量消費国がベスト8にズバリ！

～お酢の消費量とサッカーの強さの相関関係～

《トピックス》

■ミツカンの予想的中！！ お酢の大量消費国がベスト8にズバリ

サッカーの世界的大会が始まる前に出したミツカンの大胆予想が見事的中！ お酢の消費量が多い上位8ヶ国の中で、5ヶ国が準々決勝に残りました。お酢の消費量1位ドイツと2位のアルゼンチンの直接対決(6月30日)が事実上の決勝戦といえるでしょう。

■新発見！ 後半戦残り5分に強いお酢の大量消費国

暑さが最大の敵といわれる今大会。終盤に力を発揮している国の得点ランキングは、ドイツやアルゼンチンを筆頭にお酢の大量消費国が上位を独占しています。これはお酢の代表的な健康機能である「疲労回復効果」が大きく影響しているのではないのでしょうか。

■2010年に向けて、日本に足りないのは“お酢”？

今大会の日本、後半戦の残り5分の得失点差は出場国全32チーム中で最下位。最後まで力を出しきれないスタミナ不足が敗因だったのでしょうか。一人あたりのお酢の年間消費量1位のドイツと比較すれば、日本はあと1.27ℓ不足しています。次の南アフリカ大会に向け、**選手もみんなもお酢を摂って日本代表を応援しましょう！**

※年間のお酢の消費量一人当たり:ドイツ(1.91ℓ)、日本(0.64ℓ)

★情報あらかると

疲労回復とお酢の関係

科学的に検証されているお酢の疲労回復サポート効果を紹介します。

■ミツカンの予想的中！！

お酢の大量消費国がベスト8にズラリ

サッカーの世界的大会が始まって約3週間、ついにベスト8が出揃いました。その顔ぶれをみると、お酢の大量消費国がズラリとなっています。お酢の消費量が多い上位8ヶ国の中から、なんと5ヶ国がベスト8に残っているのです（表1参照）。

その他の注目国として、ミツカンがダークホースにあげたお酢の大量消費国スイスは、このサッカーの大会の常連国以外で唯一グループリーグを1位で通過しました。「お酢の消費量の多い国はサッカーも強い！」というミツカンの予想は、ここに証明されたといってもよいのではないのでしょうか。

そしてついに、今大会ナンバーワンの大注目カードが6月30日（現地時間）に行われます。お酢の消費量1位のドイツと2位のアルゼンチンの直接対決。ミツカンの予想では、この試合が事実上の決勝戦です。お酢の消費量も接近していい勝負をしています。実際の試合も1点を争う好勝負になることを期待しましょう。

【参考】ベスト8（ドイツ、アルゼンチン、フランス、イタリア、イングランド、ウクライナ、ポルトガル、ブラジル）

【表1】ドイツ、アルゼンチン、フランス、イタリア、イングランドがベスト8入り

◆サッカー強豪国のお酢の消費量ランキング

ランク	国名	人口(約)	消費量(約)(家庭用)	消費量(約)(一人当たり)	調査年
1	ドイツ	8,250万人	15,760万L	1.91L	2004
2	アルゼンチン	3,810万人	7,000万L	1.84L	1998
3	フランス	6,168万人	10,290万L	1.67L	2004
4	スペイン	4,269万人	5,080万L	1.19L	2004
5	チェコ	1,025万人	1,090万L	1.06L	2002
6	スウェーデン	901万人	900万L	1.00L	2004
7	イタリア	5,788万人	5,290万L	0.91L	2004
8	イングランド	5,923万人	4,590万L	0.77L	2004
9	ポルトガル	1,053万人	780万L	0.74L	2004
10	オランダ	1,620万人	1,100万L	0.68L	2004
11	日本	12,779万人	8,145万L	0.64L	2005
12	メキシコ	10,380万人	6,340万L	0.61L	2004
13	アメリカ	28,142万人	15,220万L	0.54L	2004

参照:「スイス」約1.43L/1人当たり消費量(2004年)

参照:「ポーランド」約1.42L/1人当たり消費量(2002年)

※人口(日本除く):外務省HP参照

※日本人口:総務省HP参照

※食酢消費量(日本、アルゼンチン除く):ミツカン調べ

※食酢消費量(日本):㈱インテージ調べ SCIデータより推計

※食酢消費量(アルゼンチン):アルゼンチン大使館調べ

※食酢:食酢に他の調味料などを加えたもの(調味酢、食酢飲料等)は除く

※「イングランド」は「イギリス」と同意

■お酢とサッカーの関係 新発見！！

後半戦残り5分に強いお酢の大量消費国

暑さが最大の敵といわれている今大会ですが、そんな過酷な環境の中、試合の終盤に力を発揮している国があります。残り5分という疲れもピークに達した時間に得点を入れ、失点をしていない国をランキングしました（表2参照）。すると、ここでもドイツ、アルゼンチンを筆頭にお酢の大量消費国が上位を独占しています。お酢の代表的な健康機能に「疲労回復効果」がありますが、お酢の摂取と“残り5分に強い”というお酢の大量消費国の特徴を考え合わせれば、この結果もうなずけるというものです。

【表2】

網掛けはベスト8	後半40分以降の得失点			前出のお酢の消費量ランキング	
	得点	失点	後半40以降の得失点差	お酢の消費量 ランキング	消費量 ¹⁾ (約) (一人当たり)
ドイツ	2		2	1	1.91
アルゼンチン	2		2	2	1.84
イタリア	2		2	7	0.91
スウェーデン	2	1	1	6	1.00
イングランド	2	1	1	8	0.77
フランス	1		1	3	1.67
スイス	1		1	☆	1.43
ブラジル	1		1		
エクアドル	1		1		
コートジボワール	1		1		
オーストラリア	2	2	0		
スペイン	1	1	0	4	1.19
パラグアイ	1	1	0		
チュニジア	1	1	0		
ポルトガル			0	9	0.74
オランダ			0	10	0.68
アメリカ			0	13	0.54
ウクライナ			0		
イラン			0		
アンゴラ			0		
ガーナ			0		
クロアチア			0		
韓国			0		
チェコ		1	-1	5	1.06
メキシコ		1	-1	12	0.61
ポーランド		1	-1	☆	
トーゴ		1	-1		
サウジアラビア		1	-1		
コスタリカ		2	-2		
トリニダードトバゴ		2	-2		
セルビアモンテネグロ		2	-2		
日本		2	-2	11	0.64

■2010年に向けて、日本に足りないのはお酢？

～お酢を摂って日本代表を応援しよう！～

後半戦の残り5分の得失点差を見てみると、日本は出場国全32チームの中で最下位。最後に大崩れして敗北を喫したオーストラリア戦、先制しながらも大逆転を許したブラジル戦を思い出してみましょ。暑さの中、最後まで力を出しきれなかったことが、今回の敗因の一つになっているのではないのでしょうか。

年々各国がスキルアップし、益々激戦が予想される2010年の南アフリカ大会。そんな中で勝ち抜くため日本に必要なのは、すばやく疲労回復を促すお酢の摂取ではないでしょうか。お酢の消費量ランキング世界1位のドイツ(1.91リットル)に日本(0.64リットル)が追いつくには、あと1.27リットル足りません。さあ、次の南アフリカ大会に向け、選手もみんなもお酢を摂って日本代表を応援しましょ！

★情報あらかると★

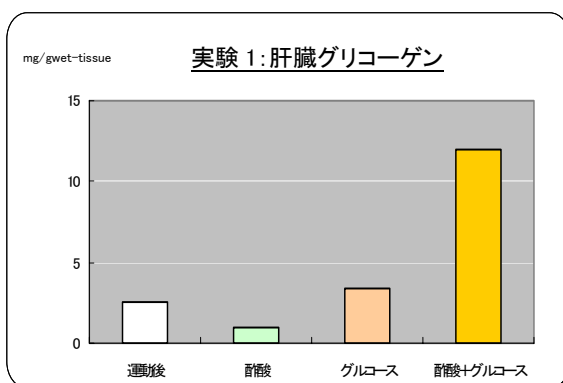
スポーツの後の疲労回復に、お酢の料理やドリンクで栄養補給がおすすめです。

【疲労回復とお酢の関係】

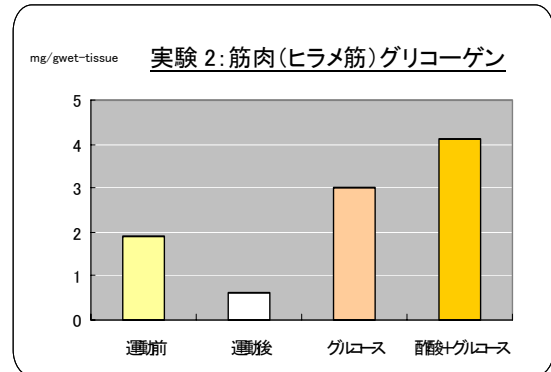
ミツカングループ本社中央研究所と名古屋大学の共同研究により、糖分と共にお酢を摂取すると疲労回復が一段と早くなることが明らかになっています。

研究ではあらかじめ運動させ、エネルギー源であるグリコーゲンを減少させたラットに「グルコース(糖)」単体、「酢酸+グルコース(糖)」の飲料を投与、その2時間後、肝臓と筋肉におけるグリコーゲンの量を測定しました(実験1・実験2のグラフ参照)。この結果、肝臓、筋肉いずれにおいても「酢酸+グルコース」を投与したほうが、「グルコース」単体よりもグリコーゲンの量が多いことが判明しました。つまり、疲労回復には「お酢と糖を一緒に摂る」ことが効果的ということです。

<ラットによる動物実験>



- ①ラットを運動させて、肝臓グリコーゲンをあらかじめ減少させる。
- ②運動終了後、「酢酸」、「グルコース」、「酢酸+グルコース」の飲料を投与する。
- ③投与後2時間後に、肝臓のグリコーゲン量を測定する。



- ①ラットを運動させて、筋肉グリコーゲンをあらかじめ減少させる。
- ②運動終了後、糖質をすべてグルコースにしたコントロール食と、これに酢酸を添加した試験食を与える。
- ③摂食開始2時間後に、筋肉のグリコーゲン量を測定する。

(実験1) Effect of acetate on glycogen replenishment in liver and skeletal muscles after exhaustive swimming in rats (Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports 11:33-37.2001)

(実験2) The Efficacy of Acetic Acid for Glycogen Repletion in Rat Skeletal Muscle after Exercise. (International Journal of Sports Medicine 23:218-222.2002)